

Gary Laderman, *Rest in Peace:  
A Cultural History of Death and the Funeral Home in  
Twentieth-century America*  
Oxford University Press, 2003, xlii+245pp, \$19.95. (pbk)

河原井 彩

本書は、Emory 大学宗教学科准教授である著者 Gary Laderman が、アメリカにおける死の文化史を葬儀産業に焦点を当てて描いたものである。著者は、死、科学と宗教といった題材からアメリカ宗教史・宗教学を研究しており、前作 *The Sacred Remains: American Attitude Toward Death, 1799-1883* (Yale univ.) を1996年に上梓している。19世紀アメリカにおいて独自の葬送儀礼が成立していく過程を概観した前作が葬儀産業の誕生によって幕を閉じているのに対し、本書はその続編としての位置づけを持つ。本書の議論の中心に置かれるのは、エンバーミング(遺体衛生保存術)という技術である。エンバーミングとは、遺体を洗浄・消毒し、血液の代わりに防腐剤を注入し、必要に合わせて整形や化粧を施すことで、遺族や会葬者に故人がまだ生きて眠っているだけかのように見せる技術のことである。日本ではまだあまり馴染みがない技術であるが、アメリカ・カナダでは約95%と高い実施率を誇っている。本書では、アメリカ葬儀産業の発展と変遷をめぐる業界内外の攻防を、さまざまな要因に注目し、さまざまな材料を用いながら、アメリカ独自の葬送の成立から近年における火葬の流行、そして9・11同時多発テロに至るまでのアメリカ葬儀産業の動きを網羅的に描いている。

従来のアメリカの葬送研究において、特に影響力をもっているのが Jessica Mitford による *The American Way of Death* (New York 1963) である。葬儀産業はその誕生当初から葬送の場面に商業主義と市場原理を持ち込んだ根源であるとされ、エンバーミングはその象徴として批判されることが多かったが、Mitford の議論はそうした葬儀産業・エンバーミング批判の中でもより説得力をもって受け入れられ、死や葬送について人々が見つめなおすきっかけを作ったアメリカ葬送研究の代表作である。本書は、葬儀屋 (undertaker) あるいはフューネラルディレクター (funeral director) に視点を置くことによって、葬儀産業をただ批判するのではなく、アメリカの死の文化誌におけるその役割に注目し、Mitford の議論に異議を唱えるものとなっているのである。

本書の構成は以下の通りである。

## Prologue

Introduction: 1963

1 From House Call to Funeral Homes:

    Changing Relations Between the Living and the Dead

2 Explaining the American Funeral, 1918-1963

3 Good Grief! Jessica Mitford Makes the *New York Times* Bestseller List

## 4 Keeping the Dead in Place: Old and New Patterns of Consumption

## 5 Final Frontiers: Into the Twenty-First Century

## Epilogue: 9/11

本書全体はほぼ時系列にそって構成されており、1900年代から2000年代までを概観するようになっている。まず Introduction で1963年にアメリカの葬送をめぐるどのような動きがあったかを紹介し、1章と2章では *The American Way of Death* 刊行以前の動き、4章と5章では刊行後の動きについて論じられ、3章はその間の章として1963年前後の動きが描かれている。以降この構成にしたがって、本書の内容を概観することとする。

Prologue では、死体の腐敗過程、死体の処理法を簡単に紹介し、そして死体を取り扱う人々 (corpse-handler) の社会における両義的な役割を人類学的文脈から指摘する。そしてアメリカにおける20世紀を「エンバミングの世紀」(embalming century) であるとし、アメリカ葬儀研究におけるエンバミングの占める位置を示している。そのエンバミングを行う上で、必要となる専門職がフューネラルディレクターであり、20世紀のアメリカの葬儀の中心にいるエージェントが彼らであることを明らかにしている。

続く Introduction において、Mitford の *The American Way of Death* が出版され、同時に当時のアメリカ大統領 John.F.Kennedy が暗殺された年である1963年を取り上げ、当時のアメリカの葬送をめぐる状況を描いている。1963年8月に *The American Way of Death* を出版した Mitford は、エンバミングを儲けの手段であるとして徹底的に批判し、フューネラルディレクターによる搾取を暴露することで、人々のフューネラルディレクターへの不信を募らせ、葬送における反商業主義の傾向を強めた。それだけでなく、Mitford の議論が注目されることによって、死に対して語ることがタブーではなくなり、むしろ死は当時最も注目されるトピックスとなったのである。アメリカにおける葬儀産業の評価、死者への態度を考える上で、Mitford の議論がひとつの転換点となったことは間違いないだろう。

一方、同年11月に行われた Kennedy の葬儀は立派過ぎるほど見事な「アメリカの葬儀」であった。しかしその中で唯一、彼の棺が開かれなかったことだけが例外であった。Kennedy の弟 Robert と妻 Jacqueline は Mitford の影響からフューネラルディレクターの葬儀への過度な介入を是とせず、きれいにエンバミングされた姿を国民に見せることを拒み、棺を開けなかったのである。Kennedy を敬愛する国民は盛大に行われた葬儀を快く受け入れ、彼の最後の姿を見ることができないことに悲しみながら喪に服したという。葬儀産業批判の代表的著作と、アメリカを代表する大統領の葬送が同年に行われたことは非常に象徴的である。また、5章で述べられるようにローマ教皇による火葬の許可が出されたのも同年のことであり、1963年をアメリカの葬送におけるターニングポイントとみなす Laderman の指摘は妥当であるといえよう。

1章では、近代的葬儀場とエンバミングに焦点を置きながら、20世紀前半における新たな葬送伝統の成立とその発展の過程が示されている。20世紀初頭に、死亡率の減少、死の医療化といった社会変化が起こったこと、そして近代的葬儀場が成立したことは、人々が死者の身体に触れる機会を大幅に減少させた。その近代的葬儀場の成立をもたらしたのが、エンバミングという技術の発明である。ここで、Laderman はエンバミングの「起源の神話」

(*myth of origins*)を紹介する。この言葉は葬儀産業が作り出したエンバーミングの起源を説明する言説を指しており、葬儀産業によるエンバーミングを正当化するための言説に対して *Mitford* があてた「新しい神話」(*new mythology*)という言葉を念頭においている。「起源の神話」は、古代エジプトにおけるミラと現代アメリカのエンバーミングを比較し、その二つの共通点と相違点を探りながら、エンバーミングを長い歴史の中に位置づけている。アメリカにおけるエンバーミングの発展史を描く上で、重要なターニングポイントとなるのは南北戦争である。南部で戦死した兵士を、できるだけ生前の姿に近い形で北部の遺族の元へ届けたいという人々の想いが、有用な保存液の発明を促し、エンバーミング技術の発展をもたらした。エンバーミングと近代的葬儀場の成立によって、家族から専門家、家から葬儀場へと死者の居場所が変化し、このことが死者と生者の分離と、死者の身体に向かいお別れを言いたいという人々の願望を同時に実現させたのである。

2章では、2つの世界大戦とその前後における葬儀産業の動きを紹介している。第1次世界大戦後、政府は当初想定していたよりも膨大な数となった戦死者の送還が不首尾に終わったため、彼らのための国立墓地をヨーロッパ大陸に造成する。これは遺族の悲しみを和らげると同時に、アメリカの世界平和への貢献を誇示する目的でつくられたものでもあったが、国内の遺族はあくまでも死者の送還を希望し、送還運動を起こした。その運動の中で葬儀産業は大きな役割を果たすが、それが純粋に遺族のためでなく自分たちの仕事を増やすためではないかという批判をも呼ぶこととなる。こうした葬儀産業への反発に端を発する葬儀改革運動は、宗教者を中心に1920年代から1950年代にかけて盛んに行われたが、葬儀産業側は葬送の場面においてフェューネラルディレクターと宗教者の協力があることを主張しながら、自主的にマニュアルやテキストを作成し、仕事の質の向上を図ることで、そうした声に対抗していったのである。第2次大戦においても葬儀産業は戦死者の送還に尽力し、それが戦後の葬儀ビジネスの成長につながっていった。そして戦後の産業化、商業化、科学技術の進展の中で、人々は死者が葬送において何を望んでいるのか、葬送にいくらかけるべきなのか、という疑問を抱き始めるのである。

3章冒頭部分で、1930年代から1950年代にかけてフィクションの世界において葬儀屋 (*undertaker*)のステレオタイプの生産が盛んに行われたことが紹介される。そのキャラクターは、ときにずるく野心家で無情で尊大な姿として、ときに間抜けな道化的存在として、両義的に描かれている。*Laderman* はここに人々の死に対する両義的な感情が反映されていると考え、葬儀屋が人々の意識の中でスケープゴートの役割を果たしていると分析する。一方、現実世界の葬儀屋自身はそのようなステレオタイプと実際の自身の姿との乖離に戸惑い、葬送以外の場での住民との関わりを重視することによってステレオタイプの払拭を試みるようになった。その一方で、葬儀屋やフェューネラルディレクターは心理学という新たな領域に注目し、宗教と科学が融合したグリーフセラピーを取り入れ、エンバーミングを遺族による死の受容を助けるものとして心理学的に正当化するようになったのである。

そうした状況の中で登場したのが *Mitford* であり、彼女は心理的・宗教的な文脈によるエンバーミングの正当化を「新しい神話」であるとして批判し、葬儀産業がエンバーミングを推進する目的は利益以外にはないと主張するのである。この衝撃的な著作が刊行されて以降、1960

年代から1970年代には葬儀産業が一時的に勢いを失う一方で、心理学や精神医学の分野からの悲嘆への注目が集まった。その分野から刊行された研究書にはキューブラー・ロス『死ぬ瞬間』(On Death and Dying 1969, 邦訳1971, 新訳改訂版1998)があるが、彼女はエンバーミングによって死の現実を隠すようなアメリカの葬儀は、死の否認であり死への不健全な態度が見られると指摘している。その後葬儀産業においても心理学的・セラピー的な価値の採り入れがみられ、遺体を見つめること(viewing the body)の心理学的・宗教的価値が主張されたのである。

4章では *The American Way of Death* の出版以降、1960年代後半から1980年代にかけての変容を追っている。この時期にはベトナム戦争が勃発したが、2つの大戦のときのように死者をきっかけに国民全体を一つにするような大きな動きは起こらなかった。このことは葬儀産業が生んだ葬送の「神話」が弱体化していることを示していると Laderman は述べる。そしてその弱体化の実体をホラー映画の流行を事例に説明する。死体がゾンビとなって動き出すというホラー映画は、エンバーミングへの嫌悪感・恐怖感を煽りかねないもので、エンバーミングによる安らかなお別れという「神話」を葬送の根幹に置いているアメリカの葬送全体をも揺るがすものであったといえよう。このような「神話」の弱体化が見られる一方で、Mitford が生み出した人々の死への関心は「死の認知運動」(death awareness movement)となり、タナトロジー(thanatology)という新たな領域を生み出した。これは死の分野の伝統的権威である、医師とフューネラルディレクターへの人々の挑戦でもあった。

1970年代には、米国公正取引委員会(Federal Trade Commission)が葬儀産業の調査を行い、葬儀社による不正と葬儀費用の高騰を防ぐため、オプションを含めたすべての商品の値段を公表すること、消費者が自分で商品を組み合わせる購入できるようにすることを定めた規則を1982年に制定するが、この規則は全体的な費用の値下げには直接つながらなかった。このような政府による介入の一方で、「死の認知運動」の発展がカリフォルニアにおいて「自分の葬儀を自分で決める」という運動を生み出す。このカリフォルニアの運動に見られるような伝統的慣習の拒否と個人主義化はアメリカ文化全体の動きであり、葬儀産業においてもこの傾向に応じた動きができるよう、顧客へのインタビューを重視し個々人の需要に合った葬儀を供給しようとする動きが強まる。また、移民の流入によって当時のアメリカ国民それぞれの文化的背景は非常に多様化しており、葬儀産業も多様な民族・文化に対応していく必要に迫られていた。しかし Laderman は華僑や、ユダヤ系移民、カトリック系移民の葬送において、アメリカのフューネラルディレクターの介入により、アメリカの葬送と自文化の葬送を折衷する動きが見られることを紹介し、その民族的多様性にもかかわらずアメリカの葬送が極めて均質であることを示している。

終章である5章では21世紀前後における葬儀産業の動きが描かれ、今後の課題ともいえる論点が大きく2点示されている。一つ目は、それまでには見られなかったような規模の大企業チェーンが家族経営の葬儀屋を吸収しながら都市に進出してきたことである。以前は経済的価値を見出されることのなかった葬儀業界であったが、団塊の世代が登場したことによってその世代による需要を見越した企業が葬儀ビジネスの成長可能性を見出したのである。それに加えて1980年代には生前契約が登場し、葬儀産業に思わぬ臨時収入をもたらした。しかし大企業の

ベルトコンベア的な葬送により消費者とのトラブルが頻発し訴訟が増加したこと、大企業の参入により競争が激化したこと、その一方で医療の発達により死亡率がますます低下していることが、葬儀産業を苦境に立たせている。こうした近年の葬儀産業の変化には、消費者の変容よりも大企業の進出による産業内の変容が大きく影響しているのである。

二つ目は、埋葬に替わるもうひとつの選択肢としての火葬の普及である。1963年にローマ教皇が火葬許可を出したのは前述の通りだが、1965年には移民法が改正され、火葬を伝統的に行う人々も多く移住してきたこと、また AIDS などの新しい疫病の流行によってエンバーミングなどの処置が憚られるようなケースも出てきたことなどが火葬普及に影響していると考えられる。しかし現代における火葬の特徴は、従来の葬送も選択可能な状況の中で敢えて選択されているところにある。1996年に亡くなった Mitford も火葬に付されている。火葬を選択する人々には、社会階層的に上流の人が多く、また教育水準も高い傾向にあり、環境への関心が高い人、宗教的背景が多様な人が多いと Laderman は述べている。選択肢のひとつとして火葬を選ぶ人々が出現したことにより、エンバーミングをその中心に置いてきた葬儀産業も新たなあり方を模索せざるをえなくなっているのである。

以上のように、大企業との競争、そしてますます多様化する社会の中で生き残っていくために、葬儀産業は新たな局面を迎えている。生き残りのきっかけとなりうるものとして、Laderman はインターネットなどの新たな技術の利用をあげている。しかし時代や社会状況がどれほど変わっても、「死者の身体には急に消えてもらいたくないが、あまり長くいてもらいたくない」という人々の心情はアメリカの葬送において不変の部分であると Laderman は述べる。この不変の部分を維持したまま、葬儀産業のさらなる展開を示唆する形で本論は終えられている。

Epilogue では9・11同時多発テロをめぐって、犠牲者の遺族に与えた衝撃や犠牲者の葬儀・追悼式の様子に触れながら、死者の記憶と生者との関係について述べている。

以上本書の内容を概観した。本書では視点の中心がアメリカの葬儀産業にあるため、アメリカ国外の状況について言及することはないが、その分研究書のみならずテレビや映画、広告といったさまざまな媒体に目を向け、それらから貪欲なまでに葬儀産業をめぐる動きを取り出し、20世紀アメリカにおける死の民族誌を描こうとする Laderman の意欲を見ることができよう。特に Walt Disney や Alfred Hitchcock, Mark Twain らによるアメリカ文化を代表する作品をも死の民族誌の中に位置づけていく試みはとても興味深い。その中でも本書の特徴は、Robert V. Wells のレビュー (*Journal of Social History* 38.2 2004) であげられている通り、25件ほどあるフューネラルディレクターへのインタビューにある。彼らの描写が入ることにより、フューネラルディレクターの人物像にさらに近づくことができ、ステレオタイプによる葬儀産業批判を超えることを目指した本書に適した調査法であったといえよう。しかしそのインタビュー対象は葬儀関連の専門家に限られている。この偏りにより、本書が葬儀産業寄りに描かれているという批判を向けられる可能性も十分にあるだろう。しかし葬儀産業に視点を絞り、それぞれの時代・社会状況においてフューネラルディレクターが葬儀やエンバーミングに効果的な意味を選択的に付与していった戦略的過程を詳細に描くことで、本書はアメリカにおける死の態度の変遷をも鏡像として描くことに成功しているのである。そして、それが本書のおもしろさとなっているのである。

本書を葬送の研究書として読む上で指摘できる点は、本書で登場した家族、遺族とは具体的に「誰」なのかという点であろう。評者の研究対象である現代日本の葬送においては、「誰が」葬送を行うのが重要な問題となっている。それまで葬送の担い手であった家族のあり方が大きく変容し、独身者や子どものいない夫婦といった遺族となるべき存在を持たない人々にとって自らの死後をどうするかということが大きな関心事となっている。そして、そのような変容に対応する形で新たな葬送の形が出現しつつあるのである。日本においてそのような動きは1990年代前後からようやく現われ始めたが、アメリカではさらに早くから家族の変容が起きていたのではないだろうか。1980年代から始まった生前契約は、「誰が」葬送を行うのかを考える上で重要なポイントとなる。本書では、葬送の変容に関しては消費者運動的・啓蒙的な「死の認知運動」との関わりにおいて論じられており、葬送の担い手である家族の問題がまったく触れられていないが、アメリカではどのように考えられているのかという疑問が残る。

そして、現代の状況にまで触れられているにもかかわらず、最新の先端医療に関することはまったく触れられていない。現代の日本においては、地味葬などに代表される葬送の簡素化や撒骨葬や樹木葬などの葬送の無形化が進む一方で、葬送に莫大な資金を投資し、最先端の技術を使って自らの生きた証を永久的に残そうとする動きも生じており、葬送の多様化のベクトルは簡素と華美、一瞬と永久の両方向に向けられている。エンバーミングの技術に限ってみても現在では非常に進歩しており、数十年あるいは状態によっては永久にその姿を保つことが可能なほどになっている。世界最高レベルの生命科学技術を有するアメリカの葬送において、その分野に触れる記述がなかったのは何故だったのだろうか。

最後に、本書の意義を捉える上で、Mitford をあげることによって Laderman が何を明らかにしたかったのかを改めて問うてみる必要がある。Mitford 以降、単なる葬儀産業批判ではなく、精緻な分析によってアメリカの葬儀、そして葬儀産業の役割に注目する研究も多くなされている。無論、そうした先行研究の中においても、大企業の参入や新しい技術の利用、さらには9・11テロといったここ数年の動きを取り上げていることは本書の強みであるといえよう。また、葬儀産業研究の多くが社会学の分野によるものである中、このような著作が宗教学者の手によってなされたことにも大きな意義がある。前作 *The Sacred Remains* に比べ宗教学的な言及は少ないが、それでも現代のメディアにおける死神の図像の利用への言及や、葬儀産業に好意的であった宗教家の著作の紹介は、宗教学者の視点によるものであるといえよう。しかし本書における Laderman の主眼は、アメリカ全土にほぼ均質的に見られる葬送方法を、非合理的なものであるとして排してしまうのではなく、アメリカにおける死の作法としてそれ自体のもつ意味を認識する姿勢を提示することにあつたのではないだろうか。Mitford はエンバーミングに代表される葬送のあり方に疑問を呈し、以降人々は「奇怪」で「不自然」なそれまでの葬送と訣別し、「合理的」で「理性的」な葬送を求めるようになった。そしてその動きが「死の認知運動」を生み出したのである。しかしそういった運動や、複雑な民族的多様性や経済格差にも関わらず、エンバーミングに始まるアメリカ式の葬儀は現在もほぼアメリカ全土で受け入れられ行われている。それはまさに *The American Way of Death* といえるものなのではないだろうか。

特定の文化の習俗を「奇怪」で「不自然」なものとして一蹴せずそれ自体の意義を認める態度は、さまざまな文化における多様な宗教形態を見つめてきた宗教学者には可能なものであると

Gary Laderman, *Rest in Peace:*  
*A Cultural History of Death and the Funeral Home in Twentieth-century America*

いえよう。それと同時に、宗教学者である Laderman の念頭にはロバート・ベラーが提示した「市民宗教」概念があったのではないだろうか。多様な宗教的背景を持ちながら、国民の意識を国民的宗教に向かわせる市民宗教の構図と、多様な習俗を持ちながらアメリカ的な葬儀に収斂していく葬送の構図は酷似している。直接的な言及は本文中にはないものの、そういったことを匂わせているようにも思う。

かつて、死者儀礼あるいは追悼の場面において伝統的な役割を果たしてきたのは宗教であった。その人間が死んだことを認め、確認していく過程が葬送儀礼であり、それを担ってきたのは宗教者であった。それが現代では、死の確認は医療専門家に担われ、葬送儀礼の担い手はフューネラルディレクターに代わられている。宗教に代わり死の問題に向かうことになった葬儀産業の歴史的変遷をたどり、その役割を分析することは、死の問題に取り組みつけてきた宗教というものを考える上で重要な視点をもたらす試みであるといえるのではないだろうか。